

保育者養成における合同授業の試み ～理論・実技・実践のつながり～

Attempts at Merging Classes within Childcare Worker Training : The Relationship Between Theory, Skill, and Practice

開 仁 志 橋 本 麻 里

HIRAKI Hitoshi and HASHIMOTO Mari

はじめに

幼稚園教育要領第1章総則、第1幼稚園教育の基本において、「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること」とある。

ここで述べられているように、幼児の遊びには様々な保育領域のねらいが総合的に関係してくるものである。しかし、保育者養成においては、各科目の担当者が自分の専門領域を中心に授業を展開することが多く、学生は、自分たちの中で、各科目で学んだ内容を総合化していくことが困難である。

そこで、科目担当者間で話し合い、共通のねらいをもち、合同授業を行い、各科目の枠を越えて、学生が、遊びを総合的にとらえる視点をもつことを目指す。

また、授業のみで完結するのではなく、付属幼稚園の幼児と実際にかかわることで、学んだことが実践の場でどう生かされるのかについても、学ぶ契機となることを目指す。

本研究では、特に、保育の理論を学ぶことを目的とする科目「教育原理」（1年対象）「保

育原理Ⅱ」（2年対象）と、実技・技能・方法を身に付けることを目的とする科目「体育Ⅰ」（1年対象）「保育内容（音楽表現Ⅱ）」（2年対象）を中心に、合同授業を展開し、学生がどのような学びを得ていくか明らかにする。

I 合同授業の概要

1 共通のねらい

科目担当者間で話し合い、テーマは、「合同授業企画～夏の風物詩、浴衣を着て盆踊りを踊ろう！～」として、取り組みの趣旨を以下のように学生・付属幼稚園に伝え、共有した。各科目、付属幼稚園のねらいは、第Ⅱ章に後述する。

（趣旨）

将来、幼稚園教諭、保育士等の乳幼児を対象とする職につくことを目指す幼児教育学科の学生が、日本古来の伝統文化である七夕にちなんで飾りをつくったり、夏の風物詩、浴衣を着て盆踊りをしたりすることによって、季節感を感じ、感性や表現力を磨く。また、幼稚園幼児と一緒に踊ることによって、幼児理解を深め、高校生に授業を公開することによって、保育にか

かわる素晴らしさを伝える。

2 合同授業の流れ

(1) 当日までの流れ (表1 参照)

まず、科目担当者間で、共通のねらいをもち、計画を立て、付属幼稚園に伝えることから始めた。また、盆踊り「子どもソーラン節」を橋本から幼稚園教諭に伝え、保育の中に踊りを取り入れ、当日に向けて、幼児の意識を高めて

もらうように依頼した。

理論面として、1年生(93名)は、「教育原理」、2年生(97名)は、「保育原理Ⅱ」の中で、保育における行事の意味や、季節の移り変わりを感じる大切さなどを学び、七夕飾りを製作し、七夕ロード(学生ホール横の渡り廊下に名前を付けた)に実際に飾った。

実技・技能・方法面として、1年生は、「体

表1 当日までの流れ

	月日	1年生	2年生	付属幼稚園
6月	12日(木)			橋本から合同授業の趣旨と、盆踊り「子どもソーラン節」の踊り方を幼稚園教諭に伝える
	18日(水)	「教育原理」(開担当)において、保育現場における行事の意味や取り組み方についての講義後に、七夕飾りを製作、七夕ロードに飾り付け	「保育原理Ⅱ」(開担当)において、保育現場における行事の意味や取り組み方についての講義後に、七夕飾りを製作、七夕ロードに飾り付け	幼児が、盆踊り「子どもソーラン節」の踊りを習得
	中旬ごろ～7月初旬	「体育Ⅰ」(橋本担当)においてオリジナル盆踊りの創作		
	23日(月)～7月5日(土)		保育実習Ⅱ(保育所対象)、保育実習Ⅲ(施設対象)幼児等と七夕飾りの製作実践	
7月	6月中旬～7月7日		「保育内容(音楽表現Ⅱ)」(橋本担当)において、オリジナル盆踊りの創作	
		各自、家庭で浴衣の着付けを習得	各自、家庭で浴衣の着付けを習得	
	8日(火)	合同授業当日		

育Ⅰ」、2年生は「保育内容（音楽表現Ⅱ）」の中で、主に、オリジナル盆踊りの創作を中心に行った。

2年生は、取り組みの過程で、保育実習Ⅱ（保育所対象）、保育実習Ⅲ（施設対象）を挟むため、七夕飾りの製作などの季節にちなんだ行事の取り組みを経験する者もいた。

また、当日に向けて、家庭で浴衣の着付けを習得するように課題を出した。このことにより、当日は、ある程度着付けができていたようである。

（2） 当日の流れ（表2参照）

平成20年7月8日（火）3限、13:10～14:40に、みどり野幼稚園園庭で、「体育Ⅰ」（1年生）と「保育原理Ⅱ」（2年生）の合同授業を行った。参加者は、幼児教育学科1年生（93名）、2年生（97名）、みどり野幼稚園幼児（98名）と、幼児教育学科科目担当教員（2名）、付属幼稚園教諭（9名）である。この時、高校生（29名）が授業を見学している。新聞社、テレビ局も取材に訪れた。

学生達は、昼休み時間を使い、浴衣に着替えて、13:00ごろまでに園庭に集合する。幼稚園幼

児は、園庭で円になり待機する。

まず、開が、はじまりの挨拶をした後、全員で「七夕の歌」を歌った。その後、1年生、2年生が順番にオリジナルの盆踊りを披露した後、付属幼稚園幼児が毎年踊っている「じゃぶじゃぶ音頭」を踊り、「子どもソーラン節」を全員で踊る。最後に、「世界中の子どもたちが」を付属幼稚園副園長である男性教諭のギターに合わせて、全員で歌った。

その後、学生と幼児は握手をして別れた。実習で配属されたクラスの幼児とは、親しくなっていることもあり、声をかけあっている様子も見られた。

雨天時は幼稚園の遊戯室で行うことも予定していた。（図1晴天時の環境図、図2雨天時の環境図参照）雨天時は、遊戯室になるため、場所が狭いので、換気、待機場所、学生や幼児の動線など困難な場面が予想されたが、当日は、晴天だったので園庭で行うことができた。しかし、前日まで雨が降っており、園庭に水たまりができていた。幼稚園側の配慮もあり、泥で埋めるなどして、盆踊りをスムーズに行うことができた。

表2 当日の流れ

司会 開、学生指導 橋本、園児援助 幼稚園教諭

時間	内容
～13:10	学生は、浴衣に着替える。園児は給食。
13:10	付属幼稚園園庭に集合
13:20	七夕の歌:CD(幼稚園)
13:25	盆踊り:テープ(幼稚園) ①「1年生創作音頭」 1年生発表、2年生と幼児見学 ②「2年生創作音頭」 2年生発表、1年生と幼児見学 ③「じゃぶじゃぶ音頭」 全員踊る ④「子どもソーラン節」 全員踊る
14:00	「世界中の子どもたちが」の歌 副園長のギター
14:15	盆踊り終了

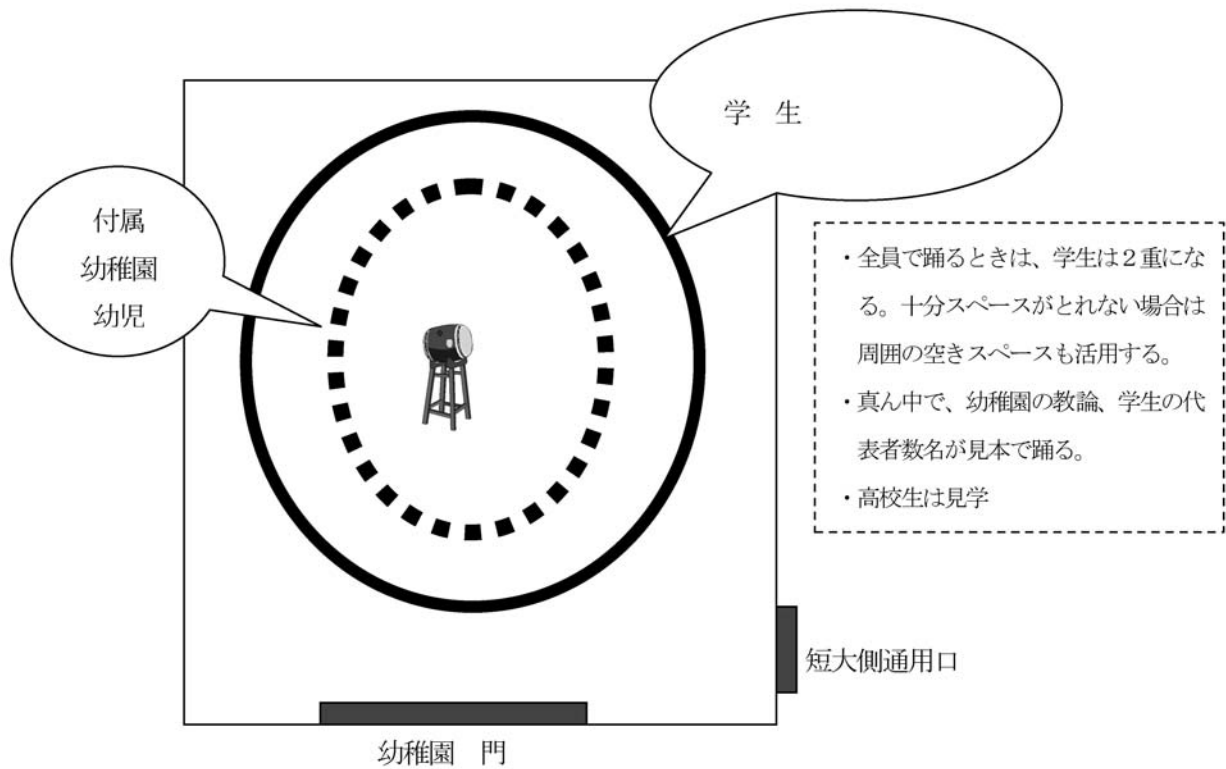


図1 晴天時（園庭）の環境構成

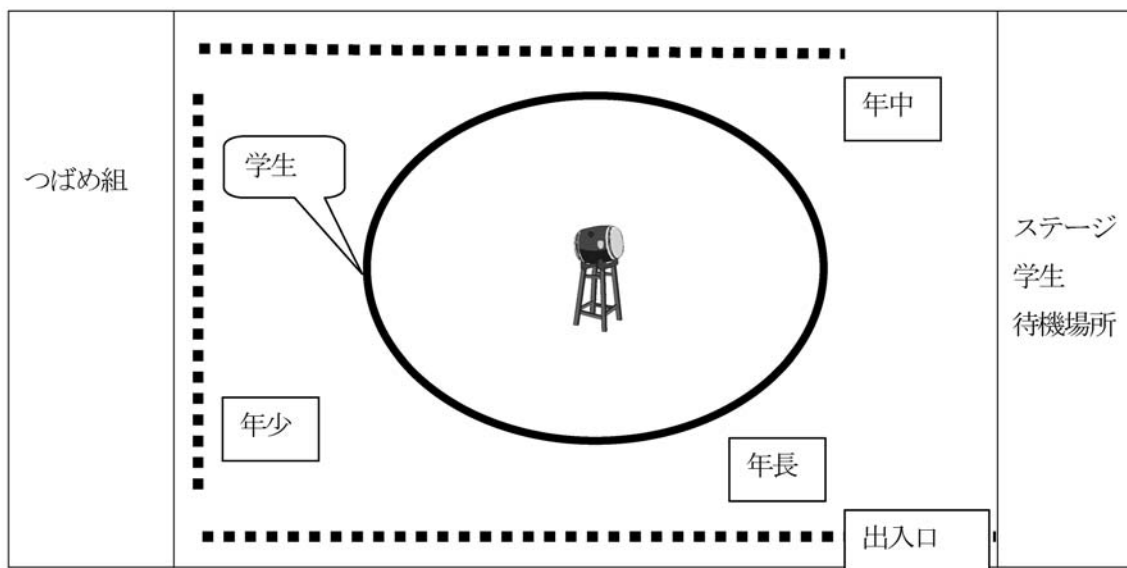


図2 雨天時（遊戯室）の環境構成

II 各科目の取り組み

1 保育における理論と実際の関連を学ぶ

富山短期大学幼児教育学科（以下本学科）では、「教育原理」を、1年生を対象とした授業科目として開講している。

文部科学省の教員免許に関する区分によると、「教育の基礎理論に関する科目」であり、「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」を学ぶことになっている。また、厚生労働省の「保育士試験の実施について」によると、出題の基本方針は、「教育に関する基礎的概念、教育活動における実践原理を体系的に理解しているかを問うことを基本とする」となっている。さらに、出題上の留意事項で、「単なる理論的側面の知識ではなく、保育の実際との関連についての出題が望ましい」としている。

次に、「保育原理Ⅱ」であるが、本学科では、1年次の「保育原理Ⅰ」を踏まえて、本学科独自に内容を定める「保育の本質・目的の理解に関する選択必修科目」であり、2年次に開講している。厚生労働省の「保育士試験の実施について」によると、出題の基本方針は、「保育所の保育を体系的に理解しているかを問うことを基本とする」となっている。さらに、出題上の留意事項で、「理論的側面の知識よりも、保育の実際との関連を重視した出題が望ましい」としている。

以上のことから、「教育原理」、「保育原理」共に、教育や保育についての理論を学ぶのが基本であるが、保育の実際との関連を重視することが望まれていると言えよう。

このことを踏まえ、できるだけ、科目担当者は、授業の中で、理論を保育現場の事例を交えながら伝えることや、事例について学生同士話し合う機会を多く設けるようにしている。

また、科目の中では、保育現場の年間計画に

も触れ、その保育の実践をする上で、どのように実践が行われるか実感するために、七夕飾りの製作及び、飾り付けを行っている。また、浴衣を着て七夕にちなんだ川柳を考えたり、七夕の劇を考え、幼児に見せたりするなどの取り組みを過去に行ってきた。⁽¹⁾

平成20年は、特に日本古来の伝統文化を学生自身が実感し、保育実践に生かしていくことをねらい、七夕飾りの製作、飾り付け、浴衣の着付けを学ぶことを課題とした。さらに、盆踊りを学生自身が考え、付属幼稚園幼児に披露することを企画した。しかし、盆踊りの製作に関しては、教育原理、保育原理Ⅱで学ぶ内容を大幅に越えることと、時間数の制限もあることから、1年生は「体育Ⅰ」、2年生は「保育内容（音楽表現Ⅱ）」の中で行うことを科目担当教員と話し合い、実施することとした。

「体育Ⅰ」「保育内容（音楽表現Ⅱ）」での学生の学びは、後述することとし、ここでは、学生が、「教育原理」「保育原理Ⅱ」のねらいである、理論の理解が学生にどのように位置付いているか、学生の感想を元に考察する。

(1) 保育の目的、意義の理解

講義形式では、保育の目的、意義について保育現場の事例も交えながら伝えている。しかし、実際に体験しないと実感できない部分もあると感じ、本研究における実践を取り入れている。

学生達に、事前に「日本古来の伝統文化を伝える」などの趣旨を十分にオリエンテーションしていたことから、講義で聞いた理論が実際の実践にどうつながるかを実感できたのではないかと考える。以下は、実践後に学生が書いた感想の抜粋である。

<学生の感想>

「昔から伝わる日本の文化を大切に、子ども達に伝えるのが保育者の役目だと思った」

「季節に合った行事を体験することはとても大切」

「最近の子ども達は、季節の伝統行事に参加することが少なくなってきたから、幼稚園でこのような行事を行うことは大切だと思う。このことで、保護者との会話も生まれ、地域の人とのかかわりも生まれるのではないかと思う」

「私自身、浴衣を着るのは初めてだった。これを機会に着付けができるようになり、うれしい」

(2) 幼児理解

幼児を理解する大切さについても、講義形式で説明している。しかし、実際の幼児に触れることで、幼児の発達特性などの理解がより進むと考えられる。学生は、実習を付属幼稚園で行っているため、実習時からの幼児の成長を感じる場面も多くあったようである。以下は、実践後に学生が書いた感想の抜粋である。

<学生の感想>

「実習の時に、たくさん遊んだ子や、いつもみんなと違うことをしてしまう子も、一緒に踊っていて、子どもの成長した部分を見られた」

「子ども達が、楽しそうに踊っていた」

「実習へ行ったときに一緒に踊りを練習したが、子ども達がとても上手になっていた」

(3) 保育の内容、方法に関する理解

保育の内容・方法についても講義形式で説明している。しかし、実際に実践することで、な

ぜ、そのような内容・方法を選ぶのか、改善点は何かなどを自分なりに考えることに結び付いているように感じる。以下は、実践後に学生が書いた感想の抜粋である。

<学生の感想>

「輪になって踊ることで、子ども達と学生が一つになったようでよかった」

「ただ、踊るだけではなく、浴衣を着て踊ることが雰囲気を出していた」

「今年は、場所が狭く同じ場所で踊ったが、来年は、盆踊りらしく回って踊りたいと感じた」

「暑い日だったので、子どもに帽子が必要だったかもしれない」

2 保育における実技・技能・方法を学ぶ

本学科では、「体育」は1年生を対象とした専門科目として開講している。また、「保育内容（音楽表現Ⅱ）」は2年生を対象としており、「保育内容（音楽表現Ⅰ）」をふまえ、主に幼児の身体表現活動について学ぶ科目として開講している。

(1) 「体育Ⅰ」（1年生）において

「体育」では、前期の6月から7月にかけては、マットや跳び箱などを用いた運動遊びや体づくりにつながる授業を実践している。後期では、前期で培った自身の身体操作感覚を活かし、輪・縄・ボールなど小遊具を用いた運動遊びを経て、リズム体操作品の制作を行う予定であった。このことから「盆踊り」のような音楽に合わせて踊る実践は、後期のリズム体操制作前がのぞましいと思われた。しかし「盆踊り」は季節感があり、季節に合わせた実践を大事にしたいという思いがあった。また、特に幼児向

けの盆踊りをテーマにしていたので、楽しく、テンポも速めで“はずみ”が多いことなどから、既存で踊られている盆踊りを6～7月の授業に入るときの体慣らしとして実施した。

盆踊りの創作は、幼児たちがよく知っている「アンパンマン音頭」を提示し、グループごとに振り付けを考えた。実際に「アンパンマン音頭」は比較的好く知られているようで、学生を真似て踊ろうとする幼児が何人もいた。

体育の授業としてのねらいは、盆踊りでよく取り入れられるステップや振り付けなどをアレンジし、幼児でも踊れるような簡単なものを構成することや制作の過程・踊り自体を楽しむことであった。

創作活動は6～7月の授業時間の前半或いは後半に取り入れたが、2クラスの進行度が異なり、1学年で1つの創作作品に仕上げることができなかった。なお、創作は任意のグループで創作、発表し、他の創作作品も踊ってみることを経て、最終的に教員が各クラスの動き・振り付けのアイデアをまとめ、各クラスの踊りを構成した。よって合同授業「盆踊り」での実際の踊りは、曲は同じでも振り付けが異なる内容となった。

さらに踊りこむ時間が不足したと思われ、「もっと練習して覚えて、合同授業で発表したい」との学生の感想が多く、来年度の創作活動への期待感が高まったことに加え、練習して踊りこむことが本番の発表でより盆踊りを楽しむことにつながると思われた。

課題として、以下の2点が挙げられる。

①季節感のある運動遊びや踊りの実践は、授業の中でも適切な時期に行いたいだが、導入の仕方をより工夫し、統一した内容の踊りに仕上がるように計画を立てる。或いは合同授業での発表をクラス別にするなど工夫すること。

さらに盆踊りをより楽しむために、創作した踊りに慣れる時間を十分に確保すること。

②音楽に合わせ、リズムカルに体を動かすなどの活動は、主として後期に行う内容であるため、今後もそのねらいのもち方とそれを学生にしっかり伝えることが重要である。

以下、学生の感想の一部である。

＜学生の感想＞

「子どもたちが自分たちの踊りを見て、一緒に踊ってくれて嬉しかった」

「踊りをしっかり覚えられなかったが、楽しくできた、来年はもっと練習したい」

「自分たちで作り、踊る過程も楽しかった」

「友達とのコミュニケーションを楽しんだ」

「踊りは統一したほうがよい」

「踊りが違うことで個性が出せた」

「振り付けを工夫した、また実際に子どもの踊りを見て、簡単な動きの繰り返しであったり、ポーズがあると分かりやすいのだと感じた」

(2) 「保育内容（音楽表現Ⅱ）」（2年生）

この科目では、期間前半は主に身体表現法について実践的に行っている。期間中盤からは、主として音楽の授業で普段から使用しているテキストにある曲を選び、数人の少人数グループ、さらに個人で振り付けを考え、実践した。後半は、グループ人数を10名前後に増やし、2分程度の幼児が好む曲であることを前提に自由に選曲し、振り付けを考え、発表するものであった。「盆踊り」は、期間中盤の少人数グループでの実践のまとめ、後半の発表作品づくりの導入と位置づけた。

「盆踊り」に使用する曲は、教員がいくつか候補を挙げ、その中からグループごとに選んだ。そして、振り付けを考えるものとした。

「盆踊り」とは、どのような時に踊られており、どのような意味があるのか、そしてその音楽や振り付けの特徴をふまえた上で、「盆踊り」作品づくりに取り組んだ。

学生は、作品づくりの時間として1コマ(90分)の中で選曲し、振り付けを考え、終わりに発表した。なお、作品づくりの時間前の授業の中では、合同授業で行う「子どもソーラン節」などを踊ったり、グルーピングを済ませたり、盆踊りの候補曲を聞いたりするなどの準備を取り入れた。このグループごとの発表作品で、もっとも使用された曲を選び、教員が見て印象的であったよい動き・振り付けを再構成して1つの作品にまとめたものを次回の授業時間で練習するものであった。

曲は「かっぱなにさま?! かっぱさま?!」を選び、かっぱの特徴を現すユーモラスな動き(さら、水などをキーワードに)、歌詞に合う動き・身体表現を取り入れて構成されていたものを、各グループの表現をできるだけ反映するよう教員が再構成した。2年生は1クラスずつの授業であるため、2クラスの実践を1つにまとめた上で、最終的な「盆踊り」の練習に入ることになる。まとめる段階で、2年生は「保育実習Ⅱ」に入り、次の授業まで約2週間空いた。

「盆踊り」の創作は、盆踊りに合った曲・音楽から選曲し、比較的限定された振り付け(動きの数、“盆踊りらしい”簡単な動き、2題目以降は繰り返しなど)で、後半の授業における実践課題を進める上で参考になったと思われた。よって、「盆踊り」は後半の実践の導入として位置づけられるものであった。また、振り付けについては、中盤で実践した童謡より少し長くなることから、「盆踊り」はそのまとめとして位置づけられるものと考え、「盆踊り」の比較的限定された性質を持つ踊りを、授業の中

で効果的に取り入れることができたと思われた。

課題として考えられることは、以下の3点である。

①多くの創作作品を1つに仕上げる活動についてである。各自の創作から仕上げるまで、学生自身がより楽しんで創作し、主体的な学び・実践であるために、今回主として教員が行った「仕上げ」を教員がかかわりながら学生自身が行えるよう授業の進め方や時間配分の工夫が必要である。

②簡単な動きを繰り返し行う、飛び入りでも参加できるような盆踊りの性質上、即興的に楽しく制作してもらいたいとの思いがあり、制作に充てる時間を集約し、短く限定した。また、合同授業日が保育実習直後のタイミングであり、仕上げたものを練習する時間も非常に限られていたことから、合同授業「盆踊り」当日は、振り付けをしっかりと覚えた状態ではない学生が多く見られた。しかし、盆踊りはしっかりと振りを覚えていなくても見よう見真似で楽しめる良さがあることから、当日の実践方法の工夫で解消できる問題であるとも考えられる。

③盆踊りの伝統文化を知る機会に、創作だけでなく、地域の伝統的な盆踊りに親しむ活動を取り入れることにも今後、取り組みたい。

以下、実践後の学生の感想の一部である。

<学生の感想>

「自分たちで考えた踊りを見せ、楽しむことができた」

「練習時間が不十分で覚えられなかった(不安だった)が、楽しめた」

「簡単な振り付けを繰り返すので、創作しやすかった」

「各班の動き・振り付けが組み合わせられてよかった」

「もっと振り付けの工夫がされれば全員が楽しめ

た」
「振り付けを考えるのは難しかった」

Ⅲ 合同授業の試みに関する考察

1 合同授業の意義

(1) 理論と実技の融合

「教育原理」「保育原理Ⅱ」などの理論を教授することを中心目的とする科目と、「体育Ⅰ」「保育内容（音楽表現Ⅱ）」などの、実技・技能・方法の教授を中心目的とする科目で合同授業を試みた。

はじめにでも述べたが、遊びは総合的に指導されるべきものにも関わらず、実際の保育者養成においては、各科目担当者が専門性をもち、科目の枠内で完結する傾向が見られるのではないかと考える。

今回は、一つの共通テーマ「合同授業企画～夏の風物詩、浴衣を着て盆踊りを踊ろう！～」の元に、実践を行った。実践を行うに当たって、科目担当者間で、自分の科目では、どのような点を中心に指導するのか、役割分担を決め、理論や実技など各科目で学んだことが、最後には、実践という形で融合することを目指した。

役割分担として話し合われたことは、今回のテーマを具体例として、幼児に日本古来の伝統文化を伝える趣旨にかかわる部分、行事の在り方、七夕飾りの製作、飾り付け、浴衣の着付けを習得する意義などの部分を「教育原理」「保育原理Ⅱ」で担い、幼児達が楽しめる盆踊りをグループごとに製作する部分を「体育Ⅰ」「保育内容（音楽表現Ⅱ）」で担うことである。

このことで、理論科目と実技・技能・方法科目とのつながりを学生は意識できたのではないかと推測する。

(2) 時間上のメリット

合同授業を行うことで、時間・空間上のメリットが得られたと考える。

まず、時間上のメリットとして、七夕行事に関する時間を1年生は「教育原理」「体育Ⅰ」、2年生は「保育原理Ⅱ」「保育内容（音楽表現Ⅱ）」の時間枠の中で行うことができたことである。1科目よりも2科目の中で、時間を分担して行う方が、時間を多くとることができる。

また、七夕に関する行事ということから、季節感が大切となるため、時期が問題となる。普通、1科目につき、毎週1時間しか割り当てがない。七夕は、7月7日前後に行うとなると、それに向けた準備期間などで、毎週1時間では不足する。2科目で連携し、七夕の時期に集中して行事に関する時間をとることにより、学生の意識が高まり、タイミングを逃さず、実践を行うことができると考える。

特に、今回は、1年生と2年生合同授業のため、互いの授業時間を一致させなければならなかった。本実践にかかわる教員が、1名だと、1年生科目は担当しているが、2年生科目は担当していないなどの事態が想定される。その場合は、学年を越えた合同授業を実施することが困難になる。今回は、連携する相手を1年生科目担当者と2年生科目担当者にしたことから、授業時間を合わせる事が可能であったことがメリットとして挙げられる。

(3) 空間上のメリット

次に、空間上のメリットとしては、以下のような面がある。「教育原理」「保育原理Ⅱ」では、普通教室を使用することが原則であり、今回のような体を動かす実践である盆踊りを行うには、不適當である。「体育Ⅰ」「保育内容（音楽表現Ⅱ）」では、体育館を使用することが可能なため、活動を行う場所が容易に確保

できた。逆に、趣旨の説明を行ったり、七夕飾りの製作をしたりするには、体育館よりも、普通教室の方が、じっくりと活動しやすい面があるように感じる。

このように、科目ごとに基本的に割り当てられる教室が有効に使えると、他の学科などとの調整を経ずに活動を進めることができるメリットがあると考えます。

(4) 異年齢交流のよさ

今回は、1年生の科目と2年生の科目を合同授業としたため、互いに高め合うきっかけとなった。2年生は、「季節を感じる行事のよさ」「保育者を志す仲間と一緒に切磋琢磨するよさが伝わって欲しい」と願い、1年生は、「将来の自分の目指す姿として頑張りたい」というあこがれの思いが強まったようである。

以下は、実践後に学生が書いた感想の抜粋である。

<学生の感想>

「幼児教育学科に来て、本当によかった。今日
のことは一生忘れません」

「1年生も、初めての体験なのに、とてももの
っていてすごかった。みんなで一つになったよ
うな気がした」

「1年生、2年生、園児と一緒にそろって歌っ
たり、踊ったりできてとても楽しかった」

「高校生にも、幼児教育学科のよさが伝わって
欲しい」

「1年生は、クラスごとに違った振り付けだっ
たが、2年生のように統一していた方がよ
かったかもしれない」

「2年生のように、ふりつけをしっかりと練習
すればよかった」

「2年生のかっぱの踊りは、親しみやすい曲で

楽しめた」

(5) 附属幼稚園との連携の意義

①学生にとって

学生にとっては、各科目で習ったことがど
のように実践に生かされるかを実感できるよ
い機会となったと考える。合同授業のみで、
附属幼稚園幼児と触れ合うことなく終わる
と、模擬的な実践になる。模擬的な実践で、
幼児を介していないと、参加しているのが学
生のみなので、大人の視点でしか実践を振り
返られないのではないかと考える。

自分たちが考えた踊りに対して、どのよう
に幼児が反応してくれるか目の当たりにする
ことで、幼児と接する喜びの実感、次への改
善点の発見などの学びが生まれてくると考え
る。以下は、実践後に学生が書いた感想の抜
粋である。

<学生の感想>

「自分たちで、七夕飾りを楽しむだけではなく、浴衣を着て、子ども達と一緒に盆踊りを踊ることで、仲が深まった気がする」

「子ども達が、今日まで、一生懸命練習してきたのが、見ていて伝わってきた」

「園児がお姉ちゃんきれいだったよと言って
くれて、とてもうれしかった」

「少し練習時間が足りなかったもので、振り付けがあやふやになってしまった。来年行うときは、練習をしっかりと臨みたい」

「発表の時に、退屈そうにしている幼児もいたので、もっと振り付けを工夫して楽しめるものにすればよかった」

「もっと子どもとかかわれる踊りの工夫もしてみたい」

「午前中は、雨が降っていて心配したが、午後になると晴れてよかった。園庭の水たまりも

なくなりよかった」

②幼児にとって

付属幼稚園の幼児にとっては、学生と一緒に盆踊りを踊ることにより、日本古来の伝統文化に触れる機会になったと考える。また、実習でかかわりのあった学生が浴衣を着て踊ることから、親近感を持ち、身近なところにいる様々な人とのつながりを感じることができたのではないかと考える。以下は、幼稚園教諭からみた幼児の様子である。

<幼児の様子>

「楽しんでいた」

「浴衣姿をみて、“きれい” “楽しい”」など雰囲気が盛り上がっていた」

「大変暑い中、よく頑張っていた」

「のりのよい子どもとそうでない子がいるので、担任のフォローがあった」

「夏祭りの前だったので、特に祭りへの意欲が高まったのではないかと」

③科目担当者にとって

科目担当者にとっては、模擬的に授業を行うのではなく、実際に幼児と触れ合える合同授業にするという課題が与えられることにより、担当する科目と保育現場の実践とのつながりを強く意識せざるを得なかった。幼児にとって活動しやすい時間設定、場所などの環境構成、準備などの役割分担など実際に即して考える必要性があった。また、司会進行を科目担当者が行うことから、学生にとって将来の保育者のモデルとなり得るように努めることなど、全ての課題が、科目担当者の合同授業に関する意識を高めることにつながっていると考える。よって、教員のFDとしても、実際に実践することはかなり有効である

と言えよう。

④付属幼稚園教諭にとって

付属幼稚園教諭にとっては、短期大学で行われている科目がどのようなねらいをもって、どのような内容・方法で行われているかを垣間見る機会になったのではないかと推測する。短期大学の科目担当者との事前の打合せ、当日の役割分担などで協力することを通じて、保育者を目指す学生を共に育てていこうとする意識が芽生えたのではないかと感じる。

また、実習担当教員として学生達とかかわっていることから、実習後にどのように学生達が育っているのかを感じるよい機会になったととらえる。以下は、付属幼稚園教諭の感想である。

<付属幼稚園教諭>

「全員で踊る共通の「子どもソーラン節」は、幼稚園教員と打ち合わせの中で、子どもが踊りやすいよう振り付けをアレンジしたことがよかった」

「何よりも学生が楽しめるということが大事だと思う。すると自然に子どもも楽しめるものとなる」

「200人近くの学生が浴衣をきるだけで、とても華やかで、夏の雰囲気が高まった」

「踊りの成果を持ち寄るだけでなく、練習の過程で学生や園児が交流するなどの“連携の工夫”も考えられる」

「各々が主体的であるように、各々のねらいをはっきりさせ、打合せをすすめていくことが大事である」

「もう少し早めに計画を立てられるとよかった。今後、行事として位置づけていくには改めて早めに計画し、こまめな打合せが必要である」

まとめ

「教育原理」「保育原理Ⅱ」などの理論を教授することを中心目的とする科目と、「体育Ⅰ」「保育内容（音楽表現Ⅱ）」などの、実技・技能・方法の教授を中心目的とする科目で合同授業を試みた。その中で見えてきた成果と課題をまとめると以下のようにになると考える。

成果

- 1 各科目間の連携を図ることで、遊びを総合的に指導する視点を学生が身に付けることにつながる
- 2 各科目の時間、割り当て教室などを有効活用することで、時間・空間上のメリットがある。
- 3 付属幼稚園との連携により、各科目でまなんだ理論と実技がどのように実践につながるか実感できる。
- 4 1年生と2年生を合同で授業することにより、異年齢交流のよさがみられる。
- 5 各科目担当者、付属幼稚園教諭との連携が深まる。

課題

- 1 科目ごとのねらいをしっかりと持ち、どの科目と連携をして合同授業をするか計画しなくてはならない。
- 2 幼児達の生活に無理なく進められるように、付属幼稚園の年間計画と照らし合わせて早めに連携をとる必要がある。
- 3 企画・運営・司会進行は、科目担当者が行ったが、今後は、学生の準備期間を多めにとり、学生主体で行う企画にしていく可能性が考えられる。

特に、課題として見えてきた部分をよく話し合い、今後につなげていきたいと考える。

(1) 開仁志「身近な環境や季節への気付きを育てる授業について」富山短期大学紀要第42巻、2007



写真1 七夕飾りの製作



写真2 オリジナル盆踊りの発表



写真3 幼児と一体になって盆踊り



写真4 実践することで幼児とつながる

(平成20年10月31日受付、平成20年10月31日受理)